

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00238

研究課題名(和文) 絵金作「芝居絵屏風」の想定復元制作 - 地域文化の継承と活性 -

研究課題名(英文) Ekin's Assumed Restoration of Shibai-e Fold Screens -Inheritance and activity of local culture-

研究代表者

野角 孝一 (nozumi, koichi)

高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・講師

研究者番号：50611084

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：絵金(絵師金蔵、弘瀬洞意1812-1876)は、幕末の狩野派で学んだ土佐の絵師である。絵金は歌舞伎や人形浄瑠璃、狂言などを題材とした極彩色の芝居絵屏風を手掛け、屋外の祭礼に飾るという独自の様式を確立した。本研究では地域の貴重な文化財を次世代へ継承するため、高知県香南市の峯八王子宮に所蔵されている芝居絵屏風の想定復元制作を行った。

研究の方法として、研究対象である芝居絵屏風がどのような場面を描いたのか、また、支持体や使用された色材についても特定できていない。そこで本研究では郷土史、美術史研究との連携の中で、日本画家の経験による表現上の気づきや自然科学的な客観性と論拠に基づいて進めていくこととした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、地域の貴重な文化財を次世代へ継承すべく、峯八王子宮に所蔵されている芝居絵屏風の想定復元制作を行った。これまでに芝居絵屏風の複製が作られることはあったが、画家の経験のみに基づく恣意的な表現に留まっている。しかし、本研究では郷土史、美術史研究との連携や科学分析によって、より多面的な視点で想定復元制作を行った。

芝居絵屏風を屋外に展示する一方で、損傷した芝居絵屏風を修理する余裕もない現状があり、祭礼自体の継続も危ぶまれている。本研究の想定復元制作を拠り所として、絵金や弟子たちが芝居絵屏風を描き続けたように、現代においても芝居絵屏風を継承する人材を育成する基盤となることを期待したい。

研究成果の概要(英文)：Ekin (The painter Kinzo, Hirose Toi 1812-1876) is a Tosa artist who studied at the Kan333; school at the end of the Edo period. Ekin has established a unique style of decorating at outdoor festivals, using a vividly colored Shibai-e fold screens that focuses on Kabuki theater, Joruri puppet plays and Kyogen. Therefore, in this research, in order to pass on the valuable cultural assets of the region to the next generation, we made an assumed restoration of the screens held in Minehachiji Shrine. As a method of research, what kind of scene was drawn by the screen, which is the subject of research, depicts, and the support and the coloring materials used. Therefore, in this research, in collaboration with local history and art history research, we decided to proceed based on the expressional awareness of the experience of Japanese-style painters and the objectivity and rationale of the natural sciences.

研究分野：日本画

キーワード：想定復元制作 絵金 伽羅先代萩 御殿 色材 芝居絵屏風

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

絵金(絵師金蔵、弘瀬洞意 1812-1876)は、幕末の狩野派で学んだ土佐の絵師である。絵金は歌舞伎や人形浄瑠璃、狂言などを題材とした極彩色の芝居絵屏風を手掛け、屋外の祭礼に飾るといった独自の様式を確立した。絵金の芝居絵屏風が御開帳する高知県各地の夏祭りは、全国的にも稀有な祭りとして注目されている。

高知の各地で開催される祭礼に飾られる芝居絵屏風は、絵金だけでなく弟子や孫弟子なども含めた絵金派と呼ばれる者達が制作していたが、それも昭和の初期までのことで、修理が行われることはあるが、現在では新しく制作されることはない。屋外に設置するため損傷の激しいものもあり、紙に印刷したものなどで代用するなど工夫がなされている現状もある。

筆者らは高知県内に点在する芝居絵屏風について 2011 年から調査を行っており、2015 年 12 月に高知県香南市香我美地区の峯八王子宮に所蔵されている屏風の熟覧調査を行った。この屏風は損傷が激しく、画面の約 7 割が欠損していたものの、描かれた人物のかたちや運筆、色彩などを鑑みて、絵金派の手掛けた芝居絵屏風であると推測した。

2. 研究の目的

本研究では地域の貴重な文化財を次世代へ継承するため、峯八王子宮に所蔵されている芝居絵屏風の想定復元制作を行うこととした。また、制作は一過性のものではなく、今後類似した事例が生じた場合の拠り所となることを目的とした。

3. 研究の方法

前述の熟覧調査で、研究対象が絵金派の芝居絵屏風であることは推測できたが、屏風絵がどのような場面を描いたものなのか、また、支持体や使用された色材についても特定できていない。そこで本研究では郷土史、美術史研究との連携の中で、日本画家の経験による表現上の気づきや自然科学的な客観性と論拠に基づいて進めた。

まず芝居絵屏風の特定を行うと共に、画面の約 7 割の欠損部分を補完するために、高知県内に点在する他の芝居絵屏風の熟覧調査や、峯八王子宮本の色材を特定するために科学分析を行った。その結果、本研究の研究対象である屏風は、これまでに確認できていない新出の芝居絵屏風であることが判明した。以上を踏まえた上で大下図の作成と運筆を繰り返し練習した上で、想定復元制作を進めた。

4. 研究成果

本研究では、地域の貴重な文化財を次世代へ継承すべく、峯八王子宮に所蔵されている芝居絵屏風の想定復元制作を行った。また、制作を行う過程で、高知県内に点在する芝居絵屏風の目視および科学調査を行い、その分析結果等を文化財保存修復学会において 3 回のポスター発表を行った。また、想定復元制作を行うための分析、色材や支持体の検討などを踏まえた制作方法の考察をまとめ、日本比較文化学会の学会誌である『比較文化研究』に投稿した。さらに想定復元制作全体の概要をまとめた著書を発表した。

本研究の特筆すべき成果として、想定復元制作を行うために不可欠な色材について、科学分析によって新たな知見が得られた点が挙げられる。とりわけ芝居絵屏風に使用されてきた緑色の色材については、これまで緑青や花緑青とされていた。しかし、破壊分析によって現代の水干絵具にあたる色材の使用が初めて認められた。特に花緑青は毒を含む色材のため、現在販売されておらず、その代用品として水干絵具を用いることは今後の芝居絵屏風の想定復元制作において大変有効な選択肢の一つとなったと指摘できる。

本研究の研究対象である芝居絵屏風はこれまで確認できていない新出の芝居絵屏風であることは前述した通りである。氏子らの聞き取りでは、芝居絵屏風はかつての峯八王子宮の祭礼では展示されていたが、客引きのために芝居絵屏風に代わって映画が上映されるようになり、やがて展示されなくなったようである。芝居絵屏風は常に社殿内に保管されており風雨を直接的に受けることはないが、温度や湿度管理の面からは十分とは言えず、その結果、劣化が激しく処分の検討に入るといった負の連鎖は必然とも言える。

これは峯八王子宮に限ったことではなく、祭礼の担い手は高齢の方が多く、損傷した芝居絵屏風を修理する余裕もない現状がある。芝居絵屏風を屋外に展示するという独自性そのものが危ぶまれており、地域文化の継承者の減少や祭り自体も含めた文化の継承問題など、緊喫の課題が山積しているということを改めて認識した。本研究で取り上げた芝居絵屏風は県や市からの文化財指定は受けておらず、持続可能な維持・保存から取りこぼされた存在なのであろう。今後は地域に残された芸術文化に触れる機会の創出と活用を教育の面から支援していく枠組みを検討していかなければならない。そのためにも本研究の想定復元制作を拠り所として、絵金の後を継いで弟子や孫弟子たちが芝居絵屏風を描き続けたように、現代においても芝居絵屏風を継承する人材を育成する基盤となることを期待したい。

参考文献

高知県立美術館監修『絵金 極彩の闇』grambooks、2012 年。

横田恵、福原僚子「絵金研究 - 新しいデータベースの構築と制作活動の実態を探る - 」『鹿島美術財団年報 (28)』、2010 年。

野角孝一、中村るい、松島朝秀、吉岡一洋、中谷有里『郡頭神社の絵金と協働教育』高知大学

教育実践研究紀要(32)、PP69-74、2018年。

繪金蔵編『繪金資料調査報告書第一集 芝居繪屏風』香南市・繪金蔵運営委員会、2013年。

東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編『図解 日本画用語事典』東京美術、2007年。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野角孝一、吉岡一洋、松島朝秀	4. 巻 142
2. 論文標題 地域文化の伝統と継承 - 芝居絵屏風の想定復元制作における色材調査と絵画表現の視点 から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 比較文化研究	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松島朝秀（高知大学）、高林弘実（京都市立芸術大学）、野角孝一（高知大学）、那須 望（高知県立歴史民俗資料館）
2. 発表標題 芝居絵屏風の色材分析 弘瀬洞意（絵金）と野口左巖（絵金派）の相違
3. 学会等名 第41回文化財保存修復学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野角孝一
2. 発表標題 知っているようで知らない絵金の世界
3. 学会等名 高知大学出前授業 in 香南市（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松島朝秀、高林弘実、紀芝蓮、野角孝一
2. 発表標題 芝居絵屏風「加賀見山旧錦絵」2作品の科学的比較調査
3. 学会等名 第42回文化財保存修復学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松島朝秀、野角孝一
2. 発表標題 芝居絵屏風の想定復元制作における色材調査と彩色表現
3. 学会等名 第43回文化財保存修復学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 野角孝一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 リーブル出版	5. 総ページ数 20
3. 書名 地域文化の伝統と継承 芝居絵屏風「伽羅先代萩 御殿」の想定復元制作	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松島 朝秀 (matsushima tomohide) (60533594)	高知大学・教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門・准教授 (16401)	
研究分担者	荒井 経 (arai kei) (60361739)	東京藝術大学・大学院美術研究科・准教授 (12606)	
研究分担者	高林 弘実 (takabayashi hiromi) (70443900)	京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・講師 (24301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	吉岡 一洋 (yoshioka kazuhiro) (20553150)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・准教授 (16401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	向井 大祐 (mukai daisuke)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関